エッセイ

Landscape から Land へ
―「鹿はニセモノ」説をめぐって―

野田研一

19世紀アメリカを代表する風景画家アルバート・ビアスタットが1858年に描いた１枚の絵、「ゴズノルド、カティハンクに到着、1602年」。この絵には、これまで誰も指摘してこなかったある謎がある。この絵には鹿が描かれているのだが、当時（つまり16－17世紀）、この種の鹿はその地域（ニューイングランド）に棲息しているはずがなかった可能性があるのだ。もしそうだとすると、画家は何を間違えたのか？あるいはなぜ間違えたのであろうか？筆者は長年にわたり、少しずつその謎を解こうと調査を試みてきた。ヨーロッパから新大陸にやってきた移民たちは、目の前にいる未知の動植物をどのように描きだしたのか。否、なぜしっかり観察することができなかったのか。この絵の検証を通じて、異文化遭遇と自然観察をめぐるアメリカ的問題を考えてみる。

マサチューセッツ州ニューベドフォードにある「捕鯨博物館」（Whaling Museum）に一枚の絵が展示されている。題して「ゴズノルド、カティハンクに到着、1602年」（図版１）。アルバート・ビアスタットという画家による1858年の作品である。「ゴズノルド」とは歴史上名高いイギリスの探検家バーソロミュー・ゴズノルド（1571-1607）。彼が率いる一行が大西洋を渡って現在のニューイングランド地域にある島嶼、カティハンク島に到着･上陸した1602年。その事蹟を描いたものである。

図版１

アメリカ大陸へのイギリスからの初期植民者のニューイングランド地域への到達という歴史的場面である。画面左奥の海浜に人間の集団がいる。右側の集団（先住民）が左側の集団（イギリス人）と対面する図である（部分拡大：図版２）。

図版２

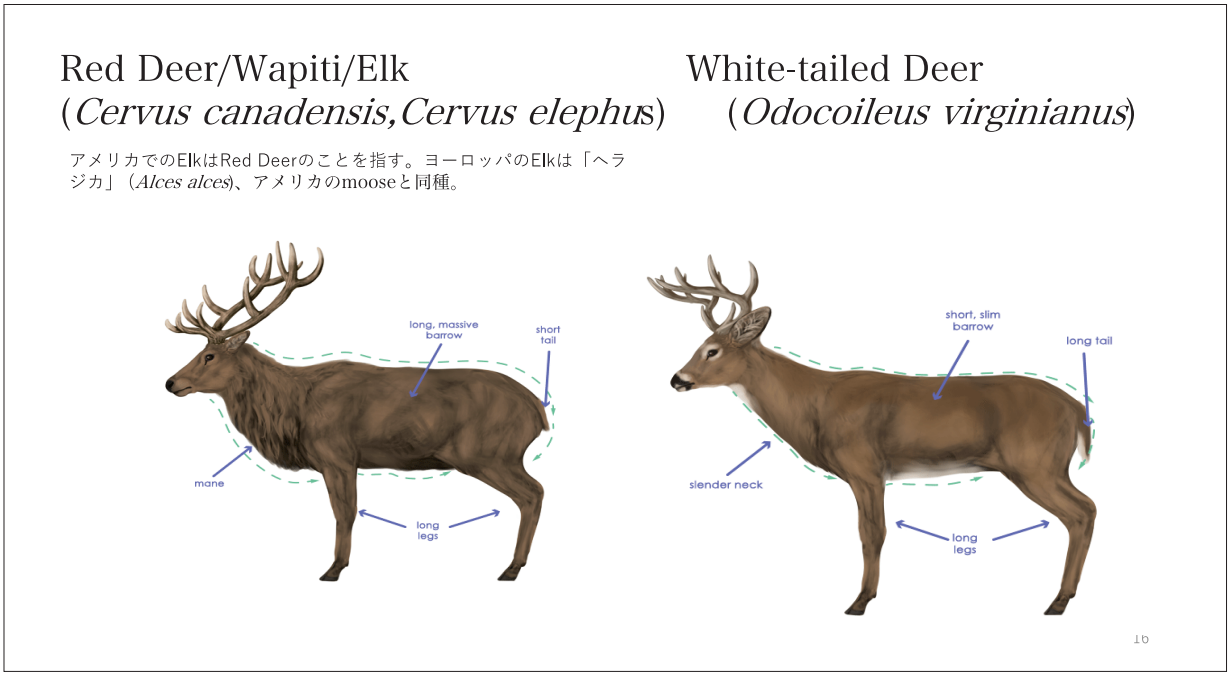
さて、この絵にはさまざまな特徴があるのだが、最大の特徴は風景を海側からではなく、大陸側から描いていることだ。これはヨーロッパ人側から描いていないという意味になる。もう一つは、この歴史に基づく人間のドラマそのものを小さく描き、前景に〈自然〉を重点的に配置していることである。この絵の制作年は1858年。上陸から約250年の歳月が流れており、それだけの時間の経過が《アメリカ》と《アメリカ人》を形づくったことを物語る。それが《アメリカ》側からのまなざしを成立させた、この風景の構図に結びついている。

前景には鹿（左）と水鳥の一群（右）が描かれている。左前景にいる４頭の鹿のうち、１頭、角の長い雄鹿が目を惹く。この鹿は離れた海岸で行われている人間界の異文化遭遇のドラマに目を向けているようにも見える。（この絵の視点を代理するという説もある。）対して、右側前景の水鳥の集団には飛び立とうとする動きが見える。これも深読みすれば、遠景のドラマに呼応する緊張感の表現であろう。ヨーロッパ人たちを大陸に迎え入れたのは先住民だけではない。アメリカ大陸の〈自然〉もまた大西洋の向こうからの植民者たちに何らかの反応をしているとみえる。

問題はアメリカ大陸側の視点を代理するこの雄鹿である（部分拡大：図版３）。じつは、30年ほど前にこの「捕鯨博物館」を訪れたとき、館内ガイドと覚しい初老の男性が近づいてきて､こう言った―「この絵の鹿はニセモノです」と。その後、じつはすっかり忘れていたのだが、15年ほど経ったある日、おそらくこの画家の画集を眺めていたとき、不意に彼の言葉を思い出した。そこでこの鹿について調査を開始した。するとまず３つの事実が明らかになった。①当時この絵について書かれた新聞評論で、「ニューイングランドにしてはトロピカルな印象がある」という指摘がある。評者が描かれた自然に何らかの違和感を抱いたらしい痕跡である。②画家自身がほかにいくつか描いた習作には鹿は描かれていない。③描かれている鹿について詳しく論じた研究文献はない。

図版３

以降、「鹿はニセモノ」説の調査を本格化した。2004年ごろのことである。題して “Deer Hunt”。この絵を所蔵する「捕鯨博物館」およびスミソニアンなどアメリカ風景画



図版４

の専門家のいそうな研究機関に問い合わせをする一方、アメリカ風景画に造詣の深い地元出身の文学研究者、およびカナダの動物学者に相談に応じてもらった。アメリカの歴史に深く根差す絵画だけに、いずれもこの絵については知悉しておられたのだが、「鹿はニセモノ」説については初耳だとの回答であった。ただ、文学研究者からは「鹿の角の形状が気になる」とのコメントがあった。

また、「捕鯨博物館」からも貴重な情報が届いた。わざわざ地元のハンターに問い合わせてくれ、「この鹿はこの地域のものではない」という返事をえたという。現在、この地域に棲息している鹿はWhite-tailed Deer（*Odocoileus virginianus*）で、この絵の鹿とは異なるというのだ。ほぼ同じ頃、カナダの動物学者からも「描かれている鹿は北米に棲息する種類ではない。少なくとも植民地時代以前にはいなかったはずだ」との情報が届いた。さらに、角の形状に触れて、「絵の鹿は角が後ろに向かって伸びている。これはユーラシア大陸の鹿の特徴（日本の鹿も同種）であって、アメリカ大陸の北東部にはいなかったはずだ」と。

では画家が描いた鹿は何だったのか？動物学者氏によれば、中央ヨーロッパ一帯に広く見られるRed Deerではないか。「画家はドイツ出身なのでよく知っていたはず」。Red Deerは北米大陸にも棲息するが、基本的には極西部が中心。当時の東部ニューイングランドにはいなかったはずだとの見解であった。図版４の比較を参照されたい。右側のWhite-tailed Deerが現在、地元に棲息する鹿で、角の主たる部分が前方に倒れている。これに対して、左側のRed Deerの角は主幹が後方に向かって反っている。

こうして、「鹿はニセモノ」説は徐々に有力になってきた。傍証的な材料は揃ってきたので、次なる問いに進むことになる。なぜビアスタットという高名な画家が、その地にいない動物を描きこんだのかという問いである。（次号へ続く）

注記

1．本稿は、日本アメリカ文学会東京支部例会シンポジウム「環境をアダプトする：エコクリティシズムと視覚芸術」（2018年12月８日、慶應義塾大学）における研究発表に基づくものである。

2．図版４の出典：Monika Zagrobelna, “How to Draw Animals: Deer-Species and Anatomy,” (Dec.25, 2013) (URL: https://design.tutsplus.com/articles/how-to-draw-animals-deer-species-and-anatomy--vector-21372)

野田研一（のだ・けんいち）立教大学名誉教授、立教大学ESD研究所運営委員、広東外語外貿大学（中国）客座教授。専門：アメリカ文学/文化、環境文学。主な業績：“The Logic of the Glance: Non-Perspectival Literary Landscape in *Wildfires* by Ooka Shohei,” *Embodied Memories, Embedded Healing: New Ecological Perspectives from East Asia*, Lexington Books, 2021.「石牟礼道子の銀河系―「直線の覇権」（インゴルド）に抗して」、『たぐい』Vol.4、亜紀書房、2021.「脱人間中心主義の文学―石牟礼道子の《魂の秘境》」、ハルオ・シラネ編『東アジアの自然観―東アジアの環境と風俗』、文学通信、2021.「ネイチャーライティング―自然体験の文学」「絵画―アメリカ風景論の出発点」、竹内理矢、山本洋平編『深まりゆくアメリカ文学―源流と展開』、ミネルヴァ書房、2021.「解説　アメリカ人自身によるアメリカの発見―See America Firstとは何か」、Athena Press, 2020. 野田研一・赤坂憲雄編『フィールド科学の入口　文学の環境を探る』、玉川大学出版部、2020.